

天 伯 B 遺 跡

(五輪原地籍)

**飯田市鼎切石地区社会体育館建設に伴なう
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書**

1992年3月

長野県飯田市教育委員会

天 伯 B 遺 跡

(五輪原地籍)

飯田市鼎切石地区社会体育館建設に伴なう
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1992年3月

長野県飯田市教育委員会

序

鼎町と飯田市の合併後、早くも7年が経過しました。合併当初より懸案でありました切石地域への体育館建設も、地元地権者の協力が得られた事がありまして、平成2年度着工の運びとなりました。

建設は、飯田市教育委員会の体育課によるものですが、建設用地は埋蔵文化財包蔵地であり、工事着手前に発掘調査する事が義務づけられています。本来、埋蔵文化財は、現状のまま後世に伝えるべきものですが、次善の策として、発掘調査を行ない記録として後世に伝えるべく努力しています。

この体育館建設にかかる前、平成2年8月から発掘調査を行ない、平成3年度末に報告書の発行を見たわけです。

今回の発掘調査を行なった場所は、五輪原地籍であり、五輪というのは、仏教に関係が深く、平安時代から鎌倉時代に、供養塔とか墓標に盛んに用いられた、五輪塔に由来すると思われます。この地名は古くから開けていた事を示していると思います。

この報告書にもありますとおり、古く住んでいた家などの発見は少なかったわけですが、すぐ北東隣は乾燥した台地で、住み良かった事が推測でき、住居跡も埋まっていると思われます。

終りに、調査実施にあたり様々な御協力をいただいた、関係各位に心から感謝申しあげます。

平成4年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例　　言

- 1, 本書は、鼎切石社会体育館建設に伴う、飯田市鼎「天伯B遺跡」発掘調査報告書である。
- 2, 発掘調査は、飯田市教育委員会が実施した。
- 3, 遺跡名「天伯B遺跡」に略号「T N C」と枝番として調査した地番4634を与え、現地作業から整理図面、遺物等にすべてこの略号を用い記録保存した。（飯田市遺跡詳細分布調査は、1989年に行なわれ切石遺跡群五輪原地籍であるが、古い発掘調査があり、その遺跡名と略号を使用した。）
- 4, 用地内に、5 m方形のグリットを全面に配し、南北に合わせた。南から北へ数字を、西から東へA～Nを付し、グリット名とした。
- 5, 本書は佐々木嘉和・小林正春が執筆・編集を行い、小林が総括した。
- 6, 本書に掲載した図面類の整理・遺物実測は佐々木が行った。なお、整理作業実施にあたり、整理作業員が補佐した。
- 7, 本書に掲載した遺構図の中に記した数字は、それぞれ穴の深さ（傾斜面の為、穴の壁最低部）をcmで表している。
- 8, エレベーションの水平線に付した数字は標高をmで表したものである。
- 9, 本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕を実線で、刃つぶし及び敲打痕を破線で表した。
- 10, 本書に関連する出土品及び諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館に保管している。

目 次

序	
例言	
目次	
I 経過	
1, 調査に至るまで	1
2, 調査の経過	1
3, 調査組織	2
II 遺跡の環境	
1, 自然環境	5
2, 歴史環境	5
III 調査結果	
1) 住居址	
①L 9 はり床住居址	9
2) 溝址	
①溝址 1	10
②溝址 2	13
③溝址 3	13
④溝址 1・2 を切る溝址	13
3) 穴等	14
4) ロームマウンド	16
5) 遺構外出土遺物	16
IV まとめ	17

挿 図 目 次

挿図 1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図	3
挿図 2 調査位置及び周辺地図	4
挿図 3 調査遺構全体図	7
挿図 4 L 9 はり床住居址・穴	8

挿図 5 溝址 1	11
挿図 6 溝址 3・穴	12
挿図 7 穴（用地南隅）	14
挿図 8 溝址 1・2・3、調査区境土層図	15

図 版 目 次

第1図 L 9 はり床住居址	21
第2図 溝址 1	22
第3図 溝址 1・2、穴	23
第4図 ロームマウンド、遺構外、溝址 1・2、穴	24

写 真 図 版 目 次

図版 1 調査前、遺構全体	26
図版 2 L 9 はり床住居址、溝址 1・2・3	27
図版 3 溝址 1・2	28
図版 4 溝址 3、調査区境土層、L 9 はり床住居址遺物出土状態	29
図版 5 L 9 はり床住居址出土遺物	30
図版 6 溝址 1 出土遺物	31
図版 7 溝址 2、遺構外出土遺物	32
図版 8 調査スナップ	33

I 経 過

1. 調査に至るまで

時代の進歩と共に、飯田市は道路、環境整備に力を入れ、下伊那郡の飛び地となっている、鼎町は一つのネックになっており、合併は長年の懸案であり、様々な協議が持たれた。

その合併に先立つ話し合いで、切石地区に体育館がほしいという一項が入っていた。

合併は昭和59（1984）年にその実現を見て、飯田市発展にはずみがついた。合併後飯田市教育委員会をはじめ関係各部課において建設に向けての様々な検討・協議を行ない、平成元年（1989）用地が決定された。

建設用地は、一般国道153号から約200m北西に入った所で、当該地は天伯遺跡内にあり、中央自動車道、及び鼎西保育園建設の際に発掘調査が行なわれ、縄文時代から平安時代にかけての集落址が発見された。特に古墳時代では大集落址が発見された。

その様な前例を踏まえ、長野県教育委員の指導を得て、全面発掘という方針が出され、平成2（1990）年度に行なう事となった。

2. 調査の経過

諸協議に基づき、8月3日（金）重機が入って調査に着手した。表土を重機で剥いだが、地山まで非常に深かった。8月6日（月）から遺構の検出、掘り下げ調査に入った。

その結果、須恵器・土師器が集中して、出土する場所があり壁が検出できなかったが、床面を把握し、住居址とした。

4633番地に1軒ある。

溝址は3本検出し、自然溝址と確認した。溝址は4634番地を掘り下げ調査、4633番地は壁のみに止めた。また並行して写真撮影、測量調査を実施した。全体写真撮影、測量を行ない、引き続き調査を行ない8月23日現地作業を終了した。

その後、平成4年度にかけて飯田市考古資料館において、現地で記録した図面、写真的整理を行なった。出土遺物の水洗、注記、復元作業の後、実測・写真撮影等の諸整理を行ない、本報告書を作成した。

3. 調査組織

1) 調査団

調査担当者 小林 正春
調査員 佐々木嘉和・佐合 英治・吉川 豊・馬場 保之・渋谷恵美子
作業員 伊藤 和恵・北村 重実・木下 傳・木下 当一・坂下やすゑ
清水 三郎・高木 義治・高橋収二郎・高橋 寛治・福沢トシ子
細田 七郎・中平 隆雄・正木実重子・松下 直市・松下 真幸
森 章・森 信子・矢沢 博志・吉川 正実
鼎切石地区の人々、高校生・大学生のアルバイト
整理作業員 池田 幸子・伊原 恵子・大蔵 祥子・金井 照子・金子 裕子
唐沢古千代・唐沢さかえ・川上みはる・木下 早苗・木下 玲子
櫛原 勝子・小池千津子・小平不二子・小林 千枝・田中 恵子
丹羽 由美・萩原 弘枝・林 勢紀子・原沢あゆみ・樋本 宣子
平栗 陽子・福沢 育子・福沢 幸子・牧内喜久子・牧内とし子
牧内 八代・松本 恭子・三浦 厚子・南井 規子・宮内真理子
森 信子・森藤美和子・吉川 悅子・吉川紀美子・吉沢まつ美
若林志満子・斉藤 徳子

2) 事務局

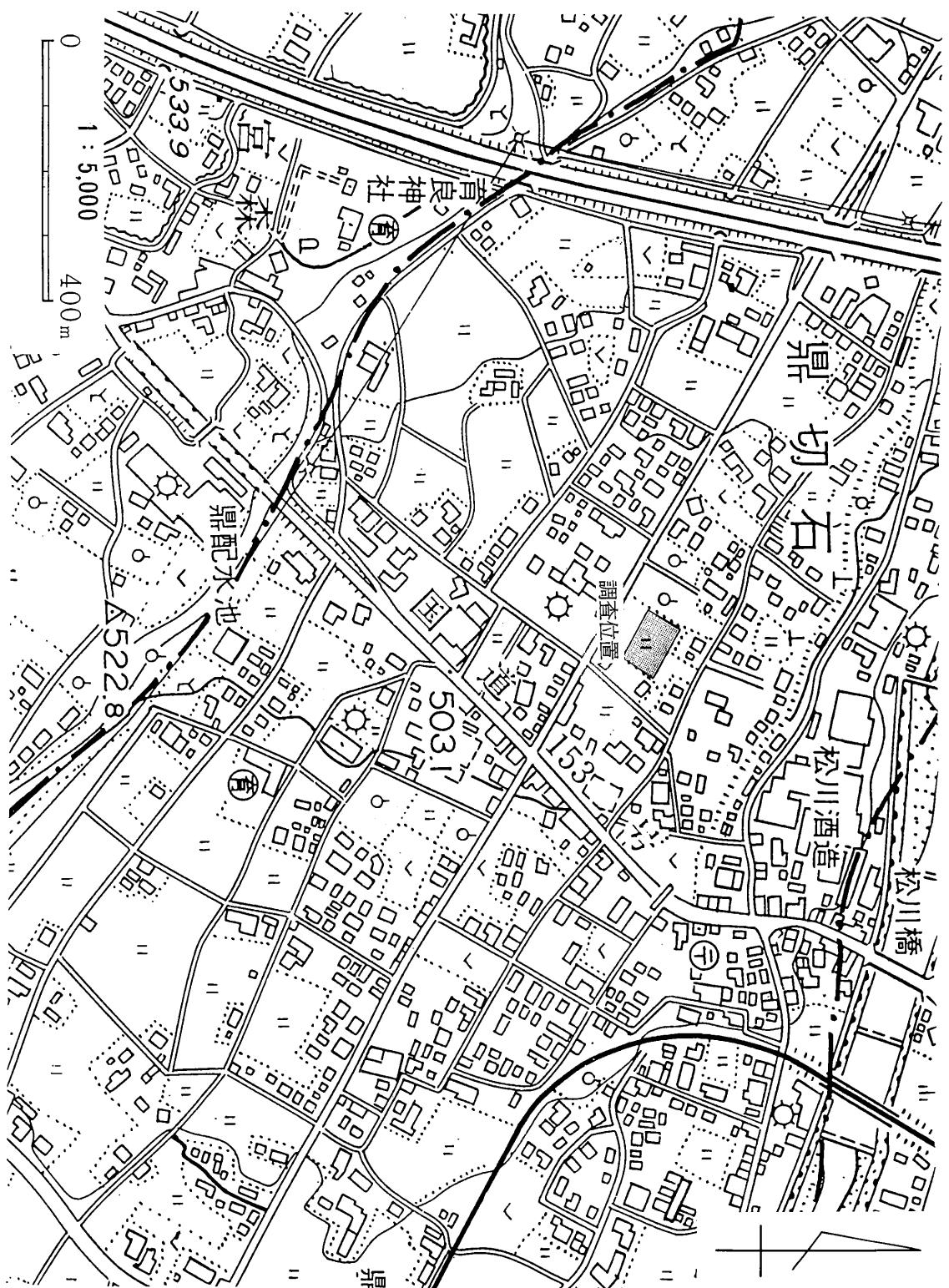
飯田市教育委員会社会教育課

竹村 隆彦（社会教育課長 平成2年度）
安野 節（社会教育課長 平成3年度）
中井 洋一（社会教育課文化係長）
小林 正春（社会教育課文化係）
吉川 豊（社会教育課文化係）
馬場 保之（社会教育課文化係）
渋谷恵美子（社会教育課文化係 平成3年度）
篠田 恵（社会教育課文化係）



- 1. 山岸遺跡
- 2. 代田遺跡
- 3. 柳添遺跡
- 4. 天伯A遺跡
- 5. 矢高原・八幡原遺跡
- 6. 日向田遺跡
- 7. 田井座遺跡
- 8. 六反畝遺跡
- 9. 物見塚古墳

挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図



挿図2 調査位置及び周辺地図

II 遺跡の環境

1. 自然環境

飯田市鼎地区は飯田市街地と、飯田松川を挟んで接し市街地にもっとも近い地区といえる。地区的形は、飯田松川に沿ってほぼ三角形を成し、長軸は約5km短軸の最長部は約3kmを測り、山地はごくわずかである。地形は飯田松川に面した段丘であり、最高4面を数える。

鼎地区的北東は、飯田松川を挟んで市街地と下伊那郡上郷町、東南は松尾地区、南西は竜丘地区と伊賀良地区に各々接している。

遺跡は切石あり、飯田松川氾濫原の次の面に所在する。北東側の氾濫原まで段丘崖を挟んで150m、南西の段丘崖まで250mの位置にあり、標高504m前後で、ほぼ段丘の中央といってよい。発掘調査で、多大な成果を上げた中央自動車道は北西300mで切石を横断している。

現在この調査範囲は水田と減反の普通畑であり、周囲はほとんど建物と果樹園である。調査地点は地山まで厚く、攪乱も入っていなかった。

耕土（表土）は黒褐色土であり、褐色土から赤褐色になる漸移層を挟み、大小の礫の混入する層である。地山は砂礫層で黄色土がわずかのり、微地形があり4634番地は低く、4633番地は高くなっている。調査時期が8月始めからという事があり、雨が少しも降らず乾燥したが、溝址の状態から地下水位が高く4634番地は湿地に近い状態で、4633番地の南 $\frac{1}{3}$ もそれに含まれ、 $\frac{2}{3}$ は乾いた状態の良い場所と推測した。

2. 歴史環境

鼎地区的遺跡を概観すると、ほぼ全面的に遺跡と捉えられており、32遺跡をかぞえる。調査がなされた遺跡は、中央自動車にかかる調査で、天伯B遺跡、山岸遺跡（注1）があり、市道妙琴原線を境に分けてあるが、一連の古墳時代後期の大集落であり、弥生時代後期の住居址も検出し先土器時代のナイフ形石器が出土している。

代田遺跡（注2）は昭和44年（1969）年に鼎町々道7号線拡幅工事の際調査され、1990年に同一遺跡である柳添遺跡（注3）が、鼎中学校グランド拡張に伴って、縄文時代中期の集落が調査された。

昭和50（1975）年に鼎西保育園新築に伴って、天伯A遺跡（注4）から、縄文時代中期集落等が検出された。

昭和58（1983）年に公園新設に伴って矢高原、八幡原遺跡（注7）の調査で渡来銭97枚が出土している。

昭和60（1985）年市道知久町中村線改良工事に伴って、日向田遺跡（注5）の調査がされ主体は平安時代であった。その後1990年には民間の開発に伴って調査（注6）された。

昭和63（1988）年市道新設に伴って、田井座遺跡（注8）が調査され、縄文時代前期初頭から弥生時代後期の住居址等が出土している。

平成元年（1989）年には個人開発により六反畠遺跡（注9）が調査され、古墳時代の住居址と柱穴多数が出土している。

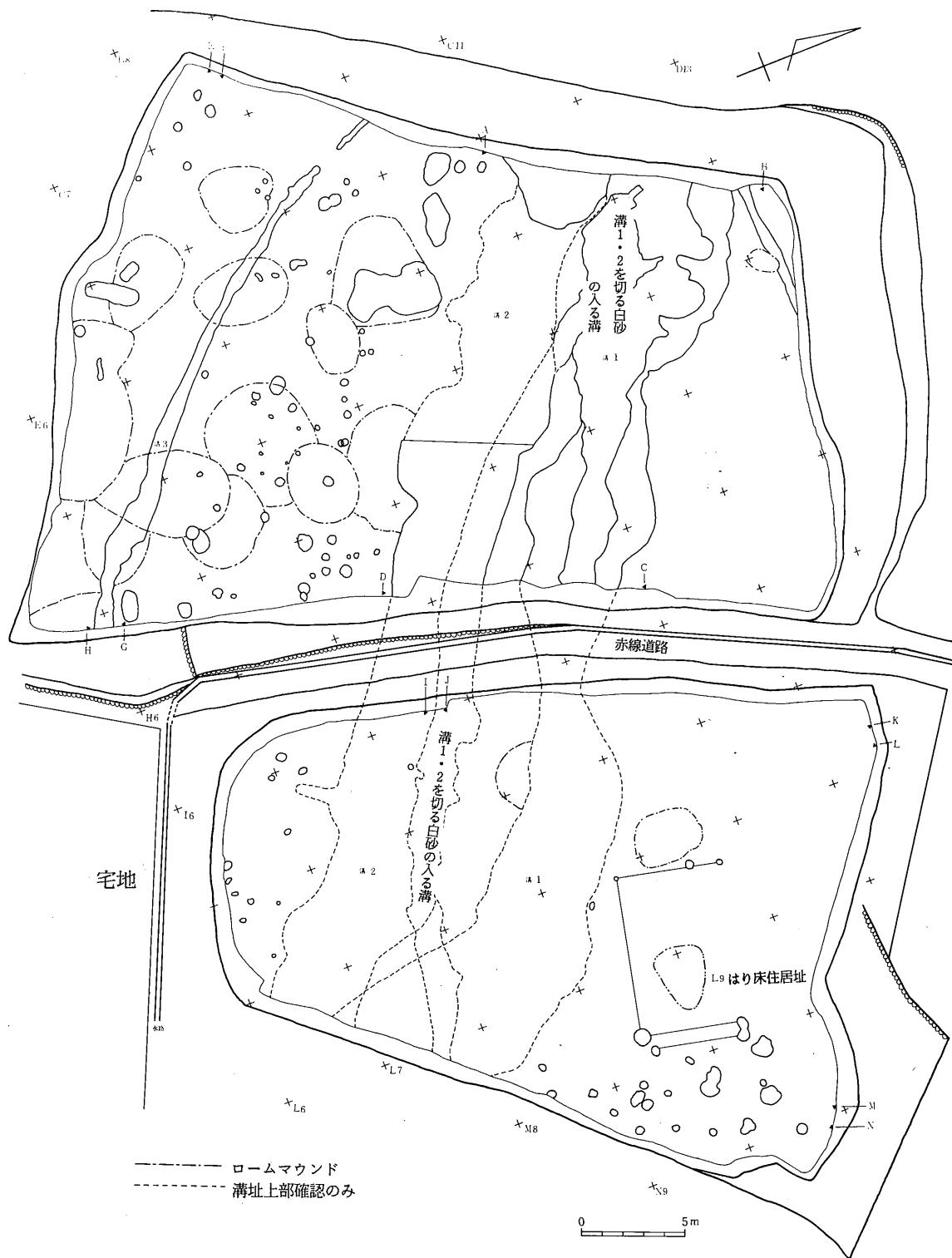
昭和61年（1986）年から国道153号バイパス新設に伴い、調査を開始、平成3年度まで2冊（注10）の報告書が出版された。平成4年度はすぐ東南の松尾地区茶柄山古墳群の調査を予定している。

平成元年（1989）年には市立病院の移転新築に先立って、物見塚古墳（注11）の調査が行なわれ、築造形態の特異性が確認された。

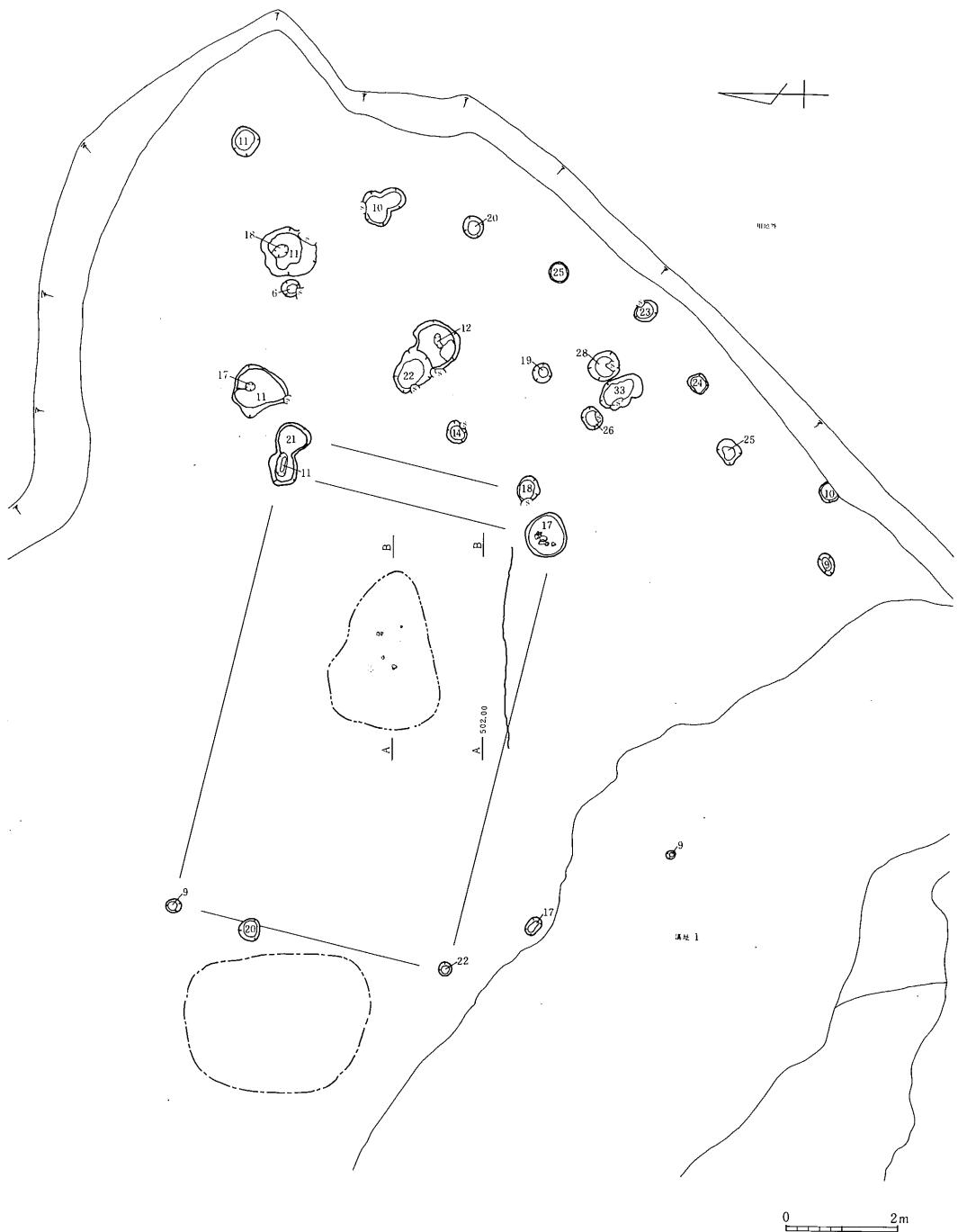
調査された遺跡を概観したが、先土器時代の遺物、縄文時代から中世にかけての住居址の発見や、集落址を成す遺跡もあり鼎地区的古代も徐々に解明されているといえる。

注

- | | | |
|--------------------------|------|---------------------------|
| 1, 中央道遺跡調査会
長野県教育委員会 | 1975 | 『中央道調査報告一下伊那郡鼎町（その2）』 |
| 2, 伴信夫・塩沢仁治 | 1969 | 「長野県下伊那郡鼎町代田遺跡」『信濃』Ⅲ、21-2 |
| 3, 飯田市教育委員会 | 1992 | 報告書刊行予定 |
| 4, 鼎町教育委員会 | 1975 | 『下伊那郡鼎町天伯A遺跡』 |
| 5, 飯田市教育委員会 | 1985 | 『鼎・日向田遺跡』 |
| 6, 飯田市教育委員会 | 1990 | 『日向田遺跡II』 |
| 7, 鼎町教育委員会 | 1983 | 『矢高原・八幡原』 |
| 8, 飯田市教育委員会 | 1988 | 『田井座遺跡』 |
| 9, 飯田市教育委員会 | 1989 | 『六反畠遺跡』 |
| 10, 飯田市教育委員会
飯田市教育委員会 | 1991 | 『田井座・一色・名古熊下遺跡』 |
| 11, 飯田市教育委員会 | 1992 | 『八幡原遺跡』
報告書刊行予定 |



挿図3 調査遺構全体図



挿図4 L 9 はり床住居址・穴

III 調査結果

用地中央の赤線道路と、用水を除いてほぼ全面調査し、次の結果を得たのでその詳細を記述する。

住居址（はり床のみ）	1軒
溝 址	4基
穴	多数

1) 住居址

① L 9 はり床住居址（捕図4、第1図）

L 9を中心にはり床で遺物が集中して出土し、慎重に黒褐色土をさげた。確認できたのは、はり床で面積が少ないが状態は良好である。はり床は、礫の混る黄褐色土の基盤に、黄色粘質土のタタキをしている。タタキの面は周囲の基盤より10cm前後高い。焼土は80cm離れて2箇所にあり、はり床上面が赤褐色を呈し、へっついを置いたものであろう。柱穴の確認はできなかったが、はり床の東南4mに穴2箇を検出した。穴は黄褐色土上面で確認し、深さ17cmであるが、穴の検出以前に甕（第1図1）・黒色壺（2）を取り上げており、穴の底部から20cm強を測り、はり床から5cm前後低い。甕の同一個体を推測したものが、はり床面から出土しており、この穴は確実に付くものであろう。この穴が確実とすれば、これを南東隅として長方形に穴が並び、はり床の建物で良いと思われる。大きさは8×5mで、長軸はN77°Wを測る。基盤からの深さは、22~9cmとやや浅い。南北の山側穴間に1個、反対側に平行して2個の穴を検出し、建物に付属するものであろう。

遺物は、土師器甕・壺、須恵器甕・壺、輸入青磁皿、石器がある。土師器甕第1図1の全体形は把握できないが、3点は同一個体と推測され、右側の胴下部は東南隅の穴から出土した。壺（2・3）は2点あり、共に東南隅の穴から出土した。2は墨書きがあり、高台付の黒色壺で内側に磨きがある。整形はロクロで、高台は貼っており、墨書きは判読できない。3はロクロ整形の壺で、底部は糸切り、須恵器の形態で焼成のみが土師器の淡赤褐色になっている。他にはり床面から、3点の甕片（7・8・9）が出土しているが別個体である。須恵器甕片10はグリット出土であるが、この住居址につくものであり、甕の肩部に近くカーブが強くなっている。壺4はロクロ整形で、高台の付かない形態を持ち、ロクロは順回転である。5は底部の小片であり、回転糸切り痕が残る。輸入磁器は古手の青磁皿片6で、内外面に櫛による陰刻が施される。釉薬は外面

に露胎部分があり、その状態から漬けがけである。石器は混入品の打製石斧2点があり、11は緑泥岩12は珪岩質である。

時期は遺物から平安時代の中頃以後である。

2) 溝址

用地を斜に横断する溝址4本を確認した。確認は用地内全部を行なったが、掘下げ調査は中央の赤線道路から西側だけを行なった。時期は大差ないが、溝址2を溝址1が切っている。

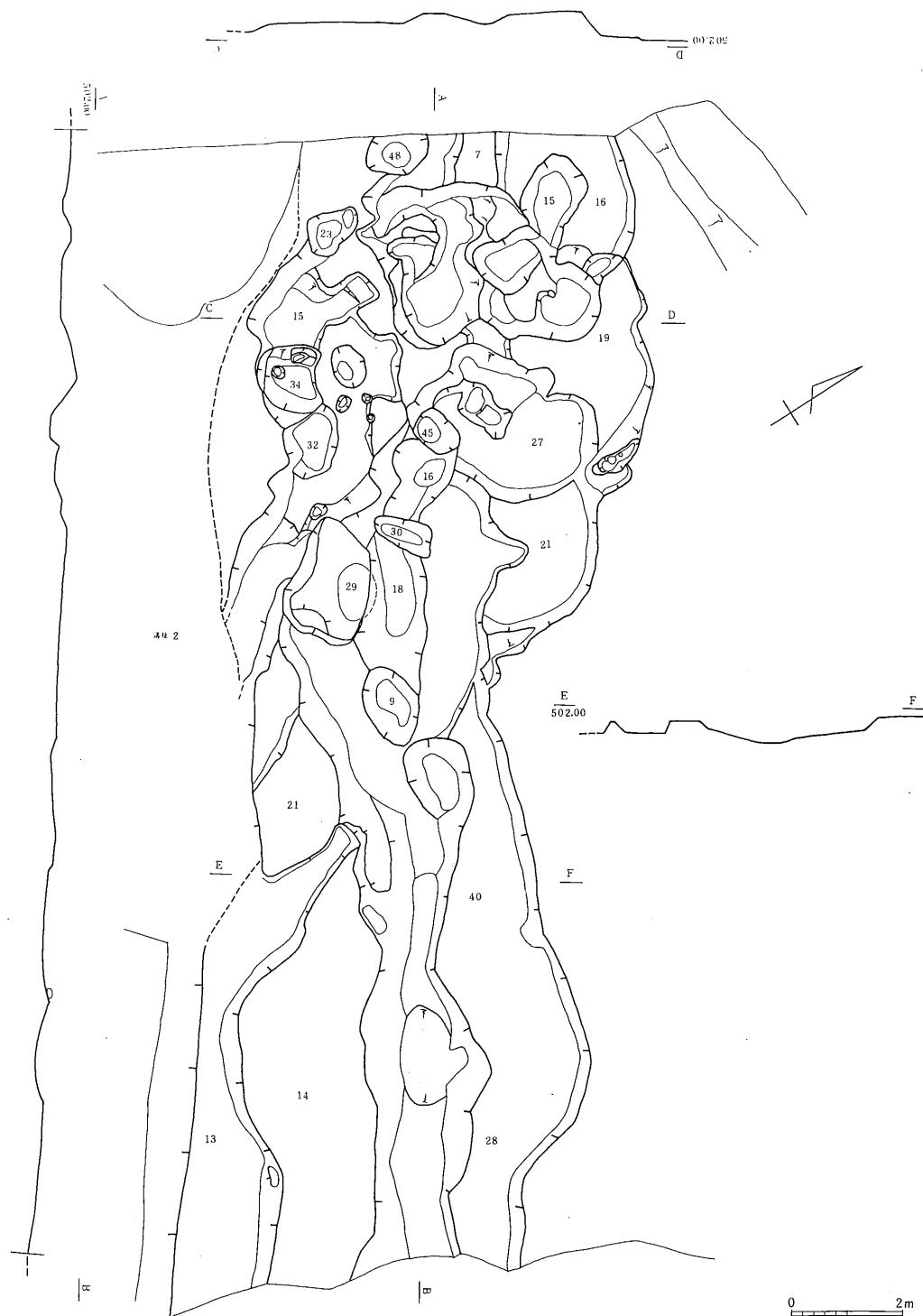
① 溝址1 (挿図5・8、第2・3・4図)

溝址1は4本の内もっとも北に位置し、規模は長さ45m、巾7~2m、深さ1m前後を確認し、方位はN56°Wを測る。水流が基盤の礫混り黄色土を削り、そこに砂・砂礫層が5層前後堆積している。底部は凹凸が多く、自然の溝址である。

遺物はすべて混入品であるが、縄文時代中期深鉢片から、中世大平鉢片までと石器が出土している。縄文時代中期深鉢は、第2図1~4の拓影4点がある。1・2は口縁片で、前者は粘土紐を貼り、後者は半截竹管で押し引きと刺突を施す。3は磨消縄文であり、中期中葉から後葉であろう。4は斜の平行沈線を施し、中期中葉である。土師器は3点あり、坏・高坏5~7である。5は黒色の坏で、内面に範なで痕が残り、外面はなでを雜に施す。6は高台の付く黒色坏で、整形は良い。貼高台の内側に、稻科の茎痕が残っている。7は高坏の脚部で、太く短く、開きは、斜に緩く広がり端部でやや開く形である。土師器の拓影は4点で、すべて平安時代の甕であり、8は胴下部片でカキ目は浅い。9は胴部片でロクロ成形されており、内外面に横なで痕が残り、胎土・焼成共に良好である。10・11は胴部の小片で、縦のカキ目が残る。須恵器は12・13の2点があり、12は大形壺の口縁で、シャープな整形が成されている。凸帯は範で作り出し、波状文は稻科の束で1回に施されており、古墳時代の所産である。13は坏片で全体的に薄く作られ底部は回転糸切り、ロクロは順回転である。灰釉陶器は14~16の3点で、すべて皿である。14は坏部で相當に流れたらしく、角が摩滅しており釉薬は内面に点々と残っている。15は高台がやや高く、破損は重焼の為であろう。釉薬は漬けがけしている。16は高台がごく低いが、回転糸切り後貼っている。釉薬はごく淡い褐緑色を呈し、薄くかけられている。大平鉢17は底部近くあり高台は先端を欠くが薄く作られている。胴・底部は厚く、内側に自然釉がかかり重焼痕が残っている。

石器は磨製石斧18、打製石斧19・第3図1~5、敲打器6、剝片小石器第4図9がある。石質は第2図19・第3図4・5が硬砂岩、第3図2・3は粘板岩、第2図18は緑色の塩基性岩、第4図1は緑泥岩、6は安山岩、第4図7・8は黒曜石である。

時期は、最終遺物の大平鉢とほぼ同時期の中世が考えられる。



捕図5 溝 址 1



捕図 6 溝 址 3 • 穴

② 溝址 2 (挿図 3・8、第 3・4 図)

溝址 1 の南側に検出し、同様に用地を横断する。自然溝址と把握した為掘下げ調査は、中央から山側の用地境を土層図作製の為に、7・2.5m掘下げただけである。長さは43m、巾は5m前後確認した。方位は溝址 1 より少し北に近く、N 51° W を測る。深さ 1 m 前後掘り下げるとき、砂層から湧水が著しく、底までは調査できなかった。溝址 1 よりは深く、砂の堆積が 8 ~ 7 層確認でき、比較的長い年月に渡って自然溝址が埋まつたものであろう。

遺物は、調査面積が少ないので、わずか出土しただけであるが縄文時代中期中葉から、平安時代の土器片と石器が出土している。第 3 図 7 は縄文時代中期中葉の深鉢口縁片拓影で、口縁に帯が付き下に刺突文が施される。8 は弥生時代後期の壺口縁で、長く流れたらしく摩滅している。9 は古墳時代の小型丸底壺で同様摩滅している。10 は平安時代の甕胴部片拓影で、比較的摩滅していない。他に小片で実測しないものの中に、常滑甕・摺鉢片があり小さな鉄滓片 2 個もある。

石器は 3 点あり 11 の打製石斧は緑泥岩で使用痕が著しい。12 は横刃型石器で硬砂岩である。第 4 図 9 は黒曜石の小型石器で使用痕が残っている。

時期は、出土遺物から最終的に埋没したのが、中世の自然溝址である。

③ 溝址 3 (挿図 6・8)

調査した溝址 4 基の内、南端に位置し、唯一自然溝址ではない。検出時に、溝址 3 の部分に黒色砂土が入っており、他の溝址とは異なっていた。長さ 27m・巾 1.5~0.3m・深さは南東端で 30 cm、北後端で 5 cm を測り途中で検出できない所がある。緩く曲るが、方位は N 43° W で、南東は宅地の下へ続き、壁の傾斜は緩く、溝の形状は比較的整っていない。検出面より上部から掘り込んでおり、底部近くを調査したものであろう。性格は、何らかの用水を推測した。

遺物は出土しておらず、時期も決めてがないが、溝址 1・2 と同時期の中世であろう。

④ 溝址 1・2 を切る溝址 (挿図 8)

溝址 1・2 を切り、白色砂の入る溝址を検出、溝址 1 の最終的な姿なので番号は付けなかった。北西端と東南端は、溝址 1 の最上部で中間は溝址 2 を切る。長さ 43m・巾 4~1.7m を確認した。深さは土層図から 1 m 以下である。

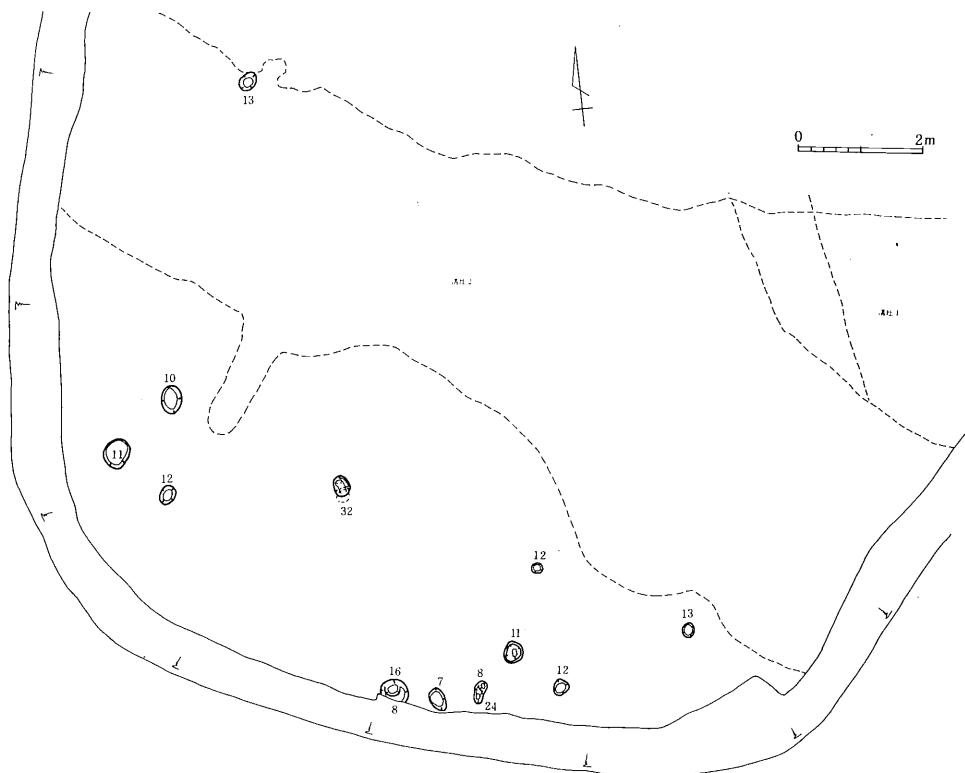
遺物は出土しなかったが、溝址 1 の上部なので同様の中世である。

3) 穴等 (挿図4・6・7、第3・4図)

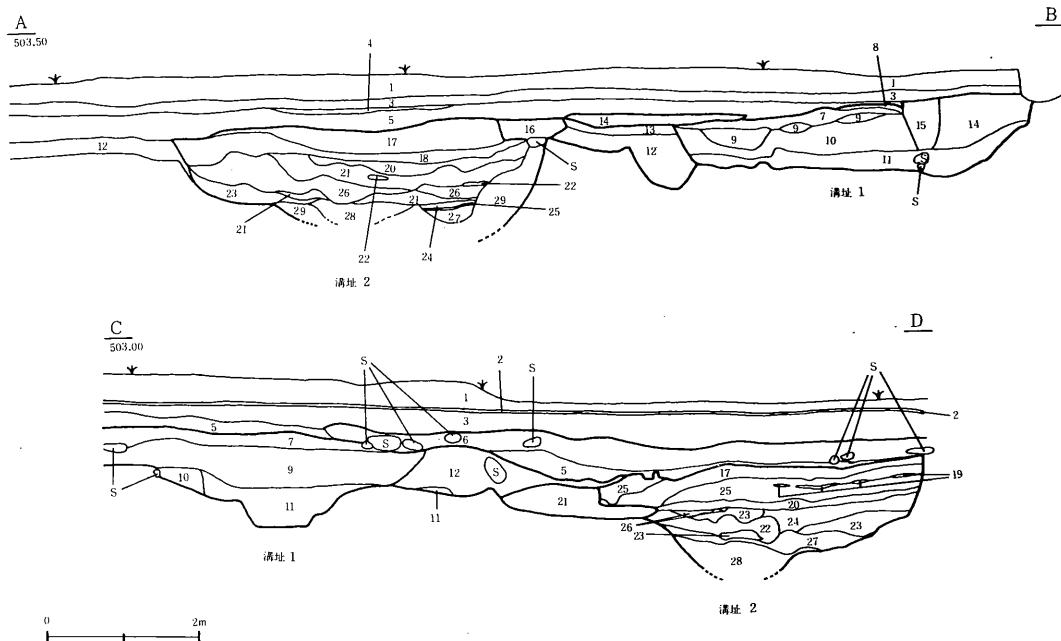
穴は部分的に集中する所があり、検出したものは掘下げ調査した。穴の多い所は、溝2から南側、L9はり床住居址の東側である。前者は褐色砂土と、ロームマウンド（黒褐色土）に掘り込まれており、後者は礫混り黄色土に掘られている。規模には、大小があり40～5cmと差がある。

遺物の出土はわずかで、図化掲載した遺物のあるものは、挿図にpit番号を付したが、2個だけである。D10P1から出土した、縄文時代中期中葉深鉢片の拓影が第3図14である。第3図14はE9P1から出土した、硬砂岩の打製石斧であり、第4図10は検出時の出土であるが、灰色を呈した硅岩の石匙である。

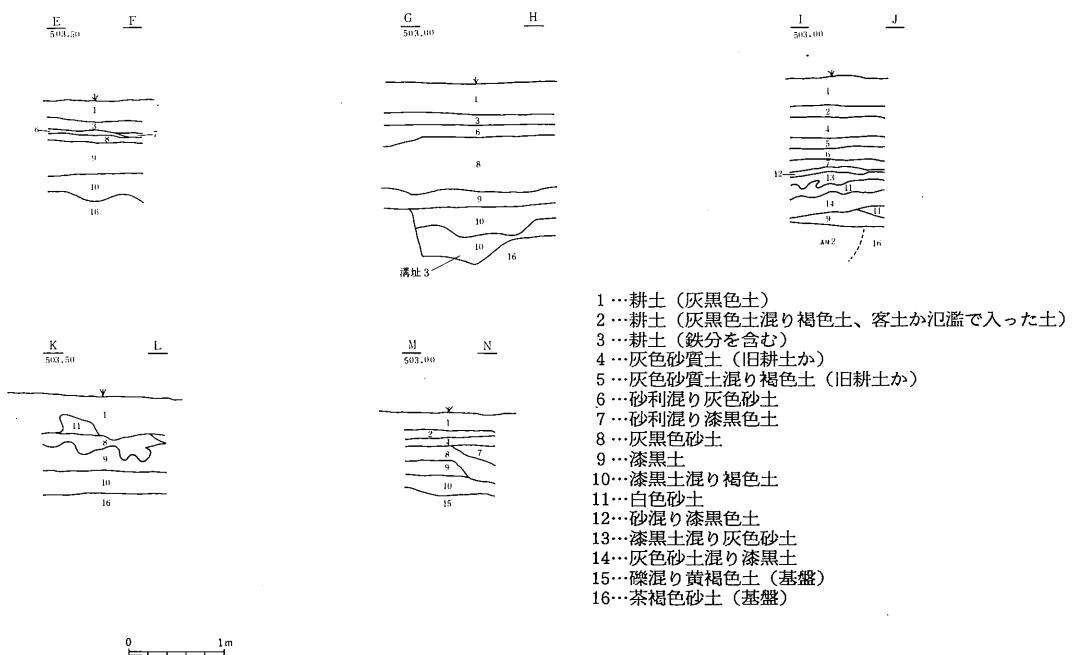
穴、それぞれの時期は把握できないが、L9はり床住居址の東側は住居址と同じか、それに近い時期が考えられる。



挿図7 穴（用地南隅）



- 1…耕土（灰黒色土） 2…耕土（水田耕盤） 3…明褐色砂土 4…灰褐色砂 5…暗褐色砂質土 6…暗灰色砂礫土
 溝址 1 7…暗褐色砂質土 8…褐色砂質土 9…灰褐色砂礫 10…灰褐色砂土 11…明褐色砂礫 12…暗褐色土
 13…明褐色砂土 14…白色砂 15…暗褐色砂質土（攪乱） 16…灰茶褐色砂質土 溝址 2 17…灰褐色砂礫 18…黑褐色土
 19…茶褐色砂 20…褐色砂礫 21…灰白色砂（疊混り） 22…灰褐色砂礫（17より褐色強い） 23…明褐色砂礫 24…灰褐色砂土
 25…黑色砂土 26…明褐色砂礫（23より粗い） 27…暗灰色砂 28…暗灰色砂礫 29…黒色土



挿図 8 溝址 1・2・3、調査区境土層図

4) ロームマウンド (挿図3、第4図)

ロームマウンドは、全体図で1点鎖線、実測図で細い実線を使って表わしてある。集中するのは、溝址2から南側であり、覆土は茶褐色砂土に黄色土が混入する。調査はしなかったが、検出時に石器第4図1が出土している。

5) 遺構外出土遺物 (第4図)

遺物は非常に少なく、掲載したものは第4図2～4の拓影と11であるが、他に縄文時代土器片から近世の磁器片がある。出土したのは、重機による表土の排除から検出までであり、深さは表面から1m前後ある。出土した遺物は、須恵器甕・壺と灰釉陶器瓶・壺の割合が高く、土師器甕(平安時代)・壺・摺鉢(中世)・瓶子(中世陶器)、須恵質陶器蓋(近世)、石器が混入する。拓影第4図2は、縄文時代中期後葉の深鉢胴部片、3・4は平安時代の甕で、前者は胴部片、後者は胴下部で底に近い部分である。5は淡枯葉色の灰釉が、厚くかかる黄瀬戸の茶碗で、外面の灰釉より下には淡い鬼板釉がかかる。6は摺鉢の胴部片で、はり床住居址の上部から出土した。

IV ま　と　め

今回発掘が実施された場所は、飯田松川の右岸に沿った段丘に位置する。段丘端部のやや高く乾燥した場所から、後背湿地にかかる南面向きの緩く傾斜した場所である。基盤の礫混り黄色土も、用地北東半分に検出し、南半分は黒褐色砂土であった。前記の、平安時代はり床住居址から中世溝址の遺構を確認、遺物は縄文時代から近世まで出土しており、段丘やや内側の、ごく一部の実態に過ぎないが、それらのいくつかを整理しまとめとする。また、調査区の微地形と遺構との関連も考えてみたい。

調査地点の微地形は、現地表と相當に異なっている。前述したが北東側は緩く高くなつており、飯田松川の段丘崖錐までの間は乾燥した場所で、古くから遺物が出土し、遺構の存在が考えられる。調査地点との比高差は、基盤から3m前後を測る。

縄文時代の遺物は、溝址覆土など流れ込みであるが、西方500mに縄文時代中期の集落があり北東側の段丘端部に遺構が存在するであろう。

弥生時代も、前述と同様であるが、西400mの中央自動車道にかかり調査した、山岸、天伯B遺跡で弥生時代後期の遺構が確認されており、本調査地は耕地としての位置付けが考えられる。

古墳時代も、前者と同様であるが、中央自動車道にかかり天伯B・山岸遺跡で、後期の大集落を確認しており、調査区は生産拠点の1つであろう。

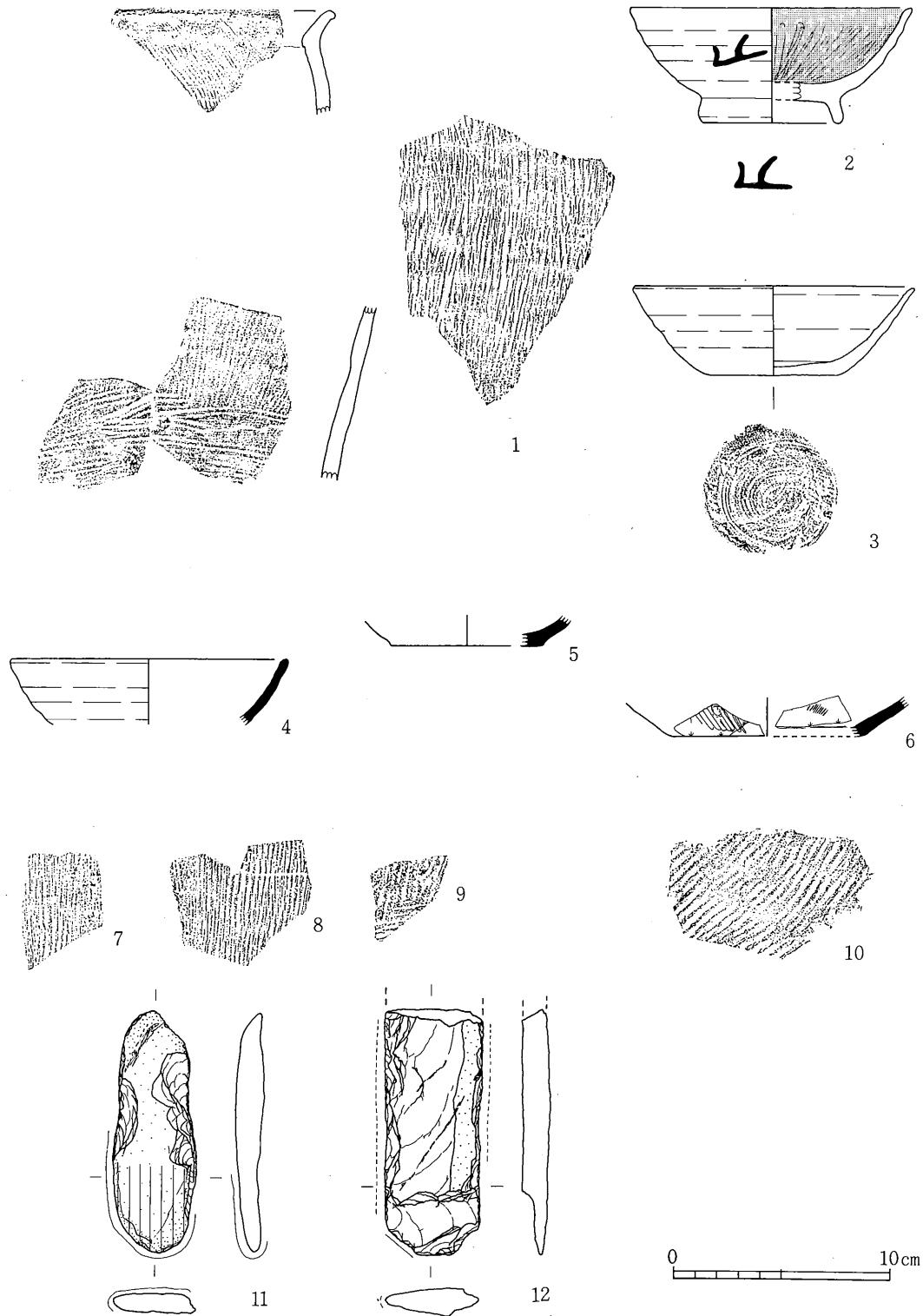
平安時代の遺構は、はり床の住居址1軒であるが、柱穴が確認でき、竪穴住居址では無い可能性が強い。地形から見て、後背湿地に最も近い住居址であり、集落は北東側に広がるものであろう。遺物は、墨書きされた土師器黒色坏が、柱穴から出土しており、字は理解し得ないが、墨書きには比較的多い書体である。又青磁Ⅲ片は、渡来品で高台の付かない形態の古い様相を持ち、庶民の持てる品物ではないだろう。平安時代住居址に、竪穴式でない形態が確認できたのは、発掘の成果である。

中世の遺構は、1本の溝址と3本の自然溝址であり、自然溝址は確認にとどめた。溝址は底部のみの調査であるが、性格不明である。

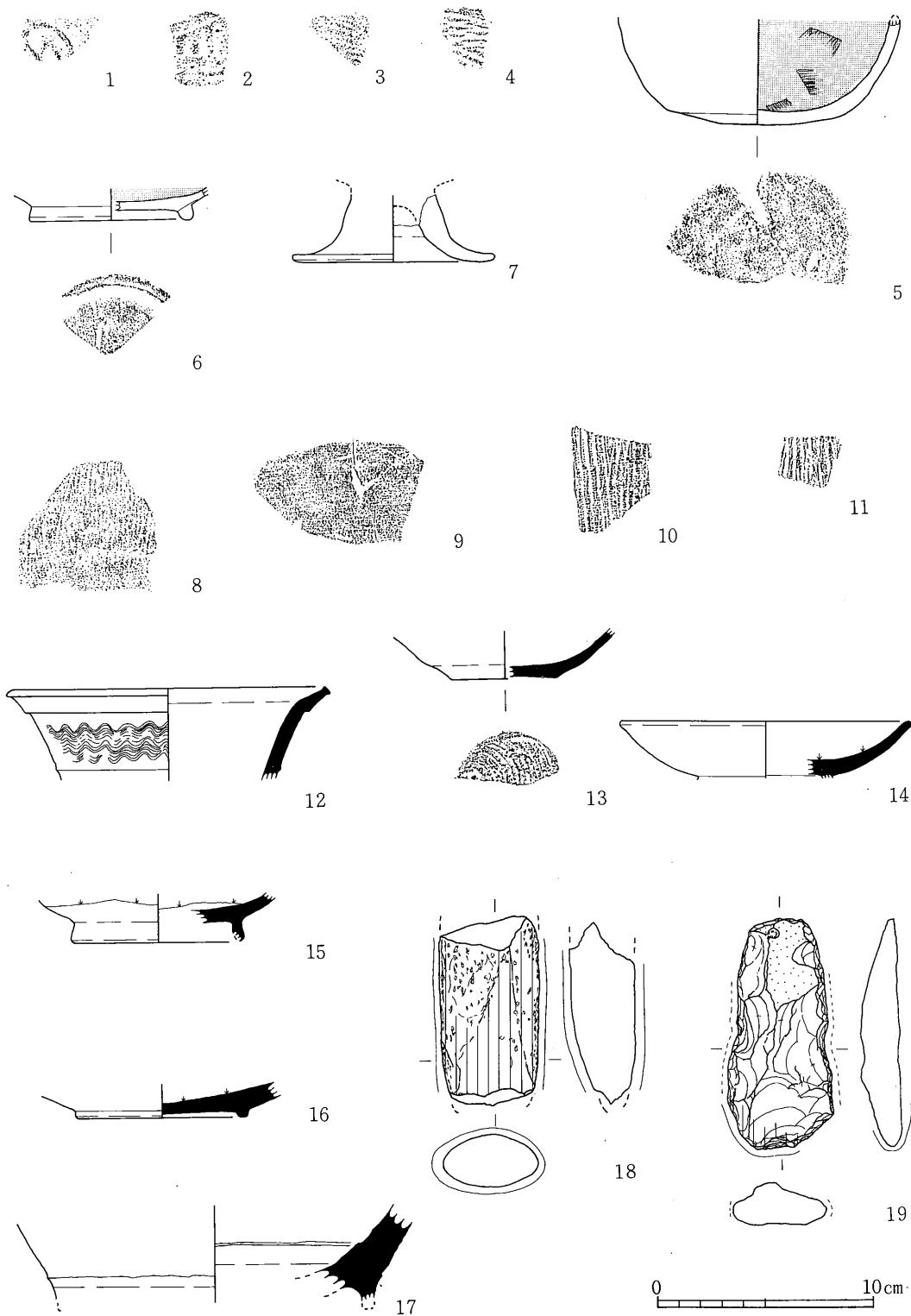
ロームマウンドは、大小確認したが、基盤が黒褐色砂土の部分が多く、ロームマウンド生成に起因するものである。ロームマウンド中の穴から縄文時代の石器が出土しており、ロームマウンドは縄文時代以後が多いと推測した。

以上、今回の調査結果から、時代別に若干のまとめをしたが、段丘面のごく一部分であり、遺構の存在が予想される場所からわずか離れており、検出遺構は少なかったが、生産基盤の場所と位置付けができた事は、今後地域の原始古代の姿を検討する上で、大きな役割を果すものといえる。

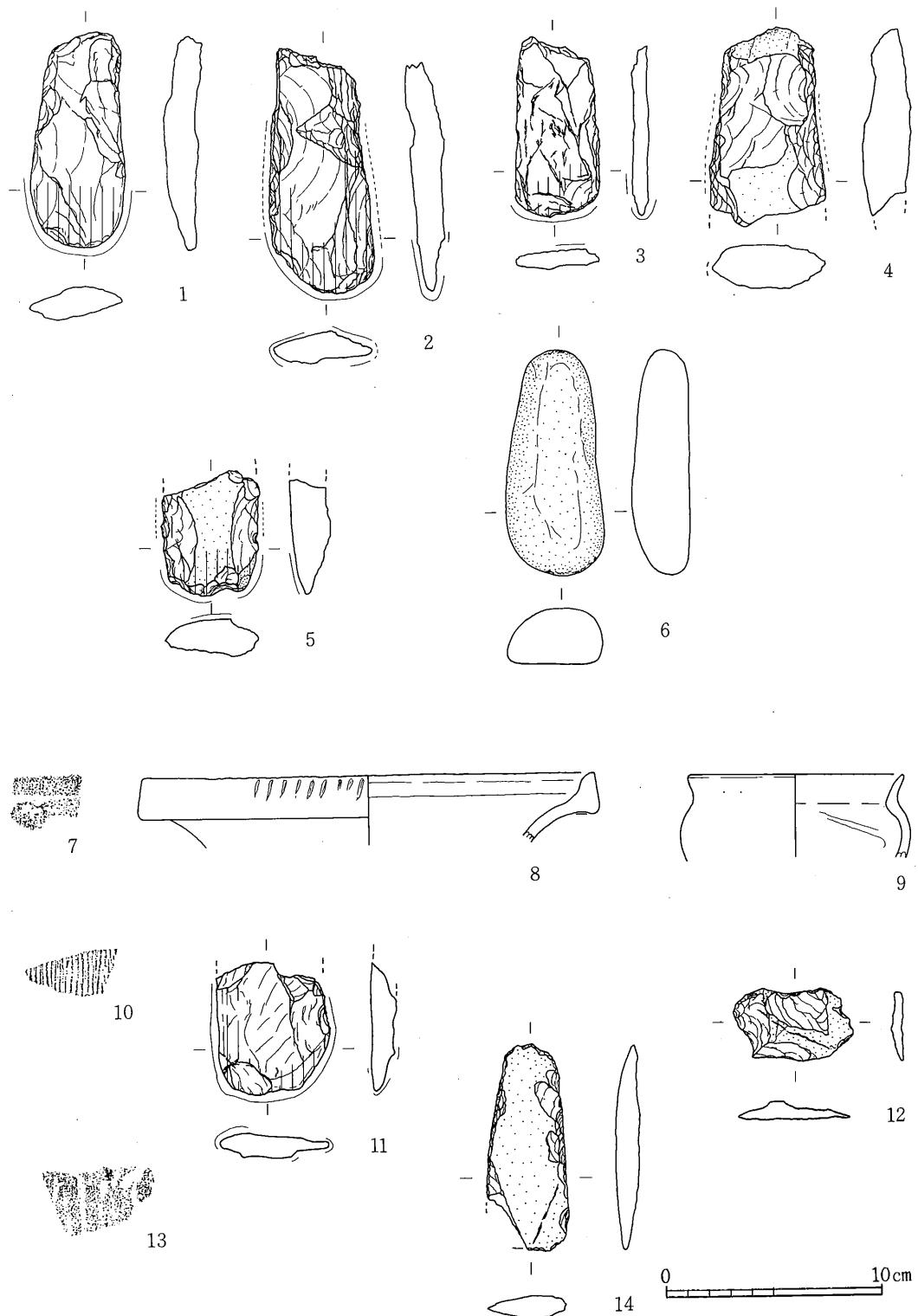
図 版



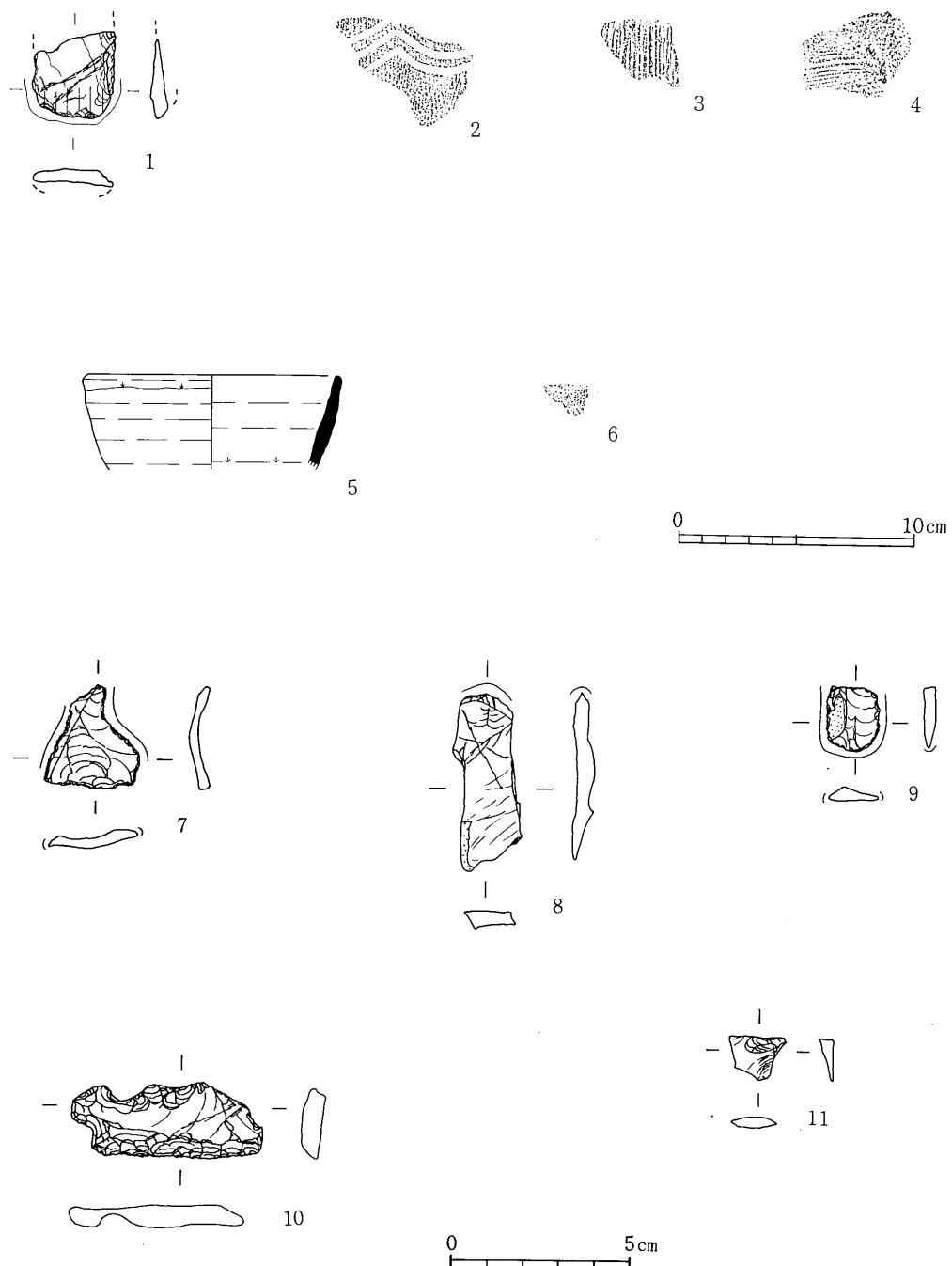
第1図 L 9 はり床住居址



第2図 溝 址 1



第3図 溝址1・2、穴（溝址1 1～6、溝址2 7～12、D10P1 13、E9P1 14）



第4図 ロームマウンド、遺構外、溝址1・2、穴（ロームマウンド1、遺構外2～6・11、溝址1・7・8、溝址2・9、E9P1・10）

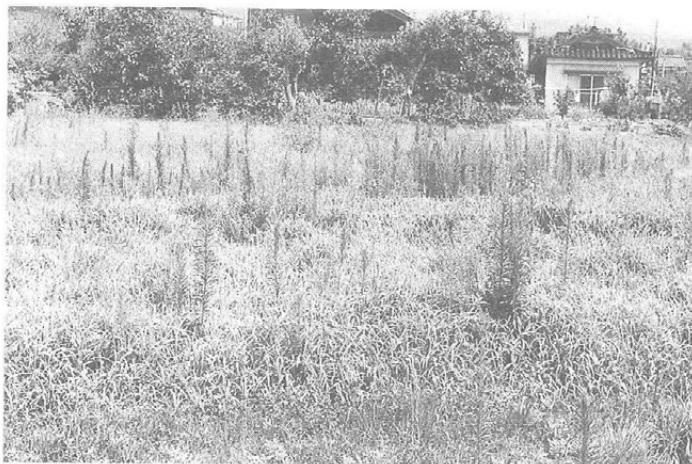
写 真 図 版

図版1

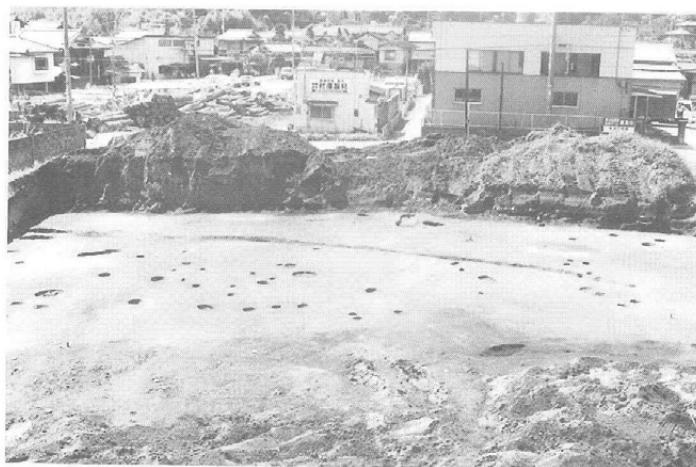
調査前南から



調査前西から



西隅遺構全体

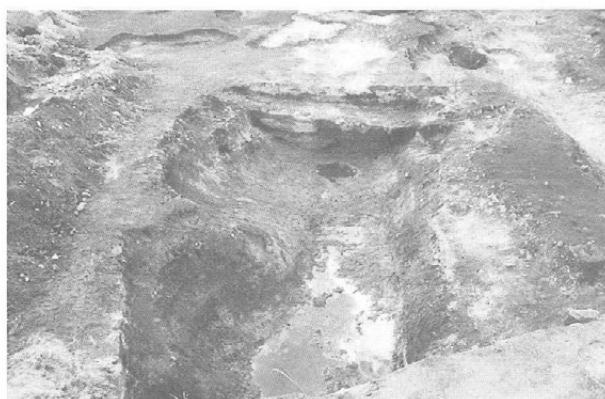




溝址 1 全体



溝址 3 全体



溝址 2 調査部分

図版3

検出状態

溝址1・白砂の入る溝



溝址1・2土層断面



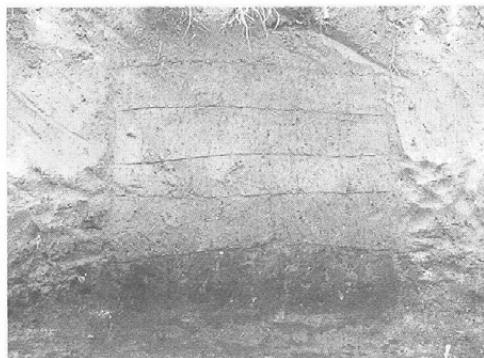
溝址2土層断面



溝
址 3
土層断面 G H



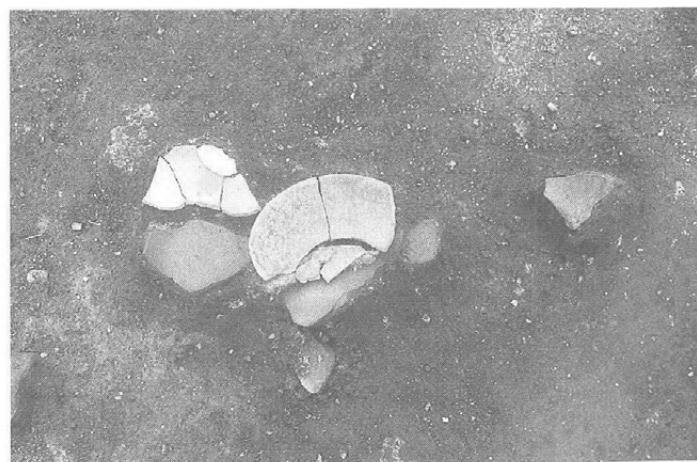
土層断面 K L



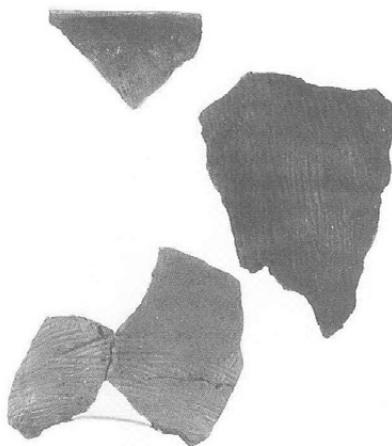
土層断面 M N



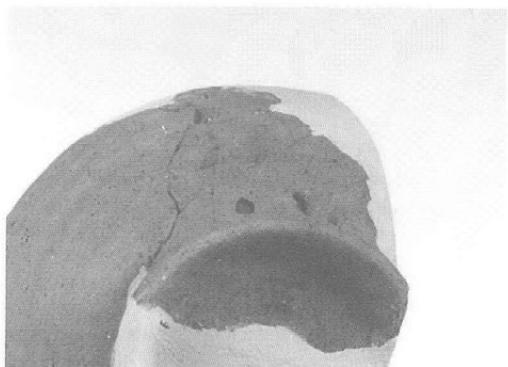
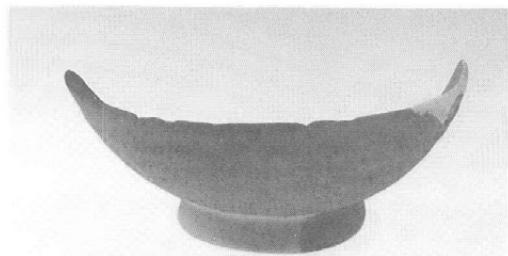
L 9 はり床住居址
遺物出土状態



図版5



壺

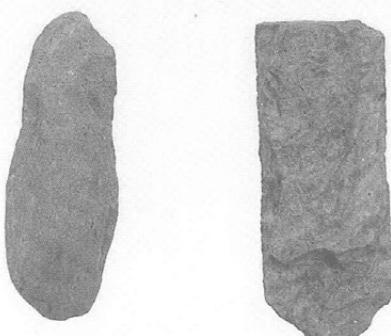


上の墨書

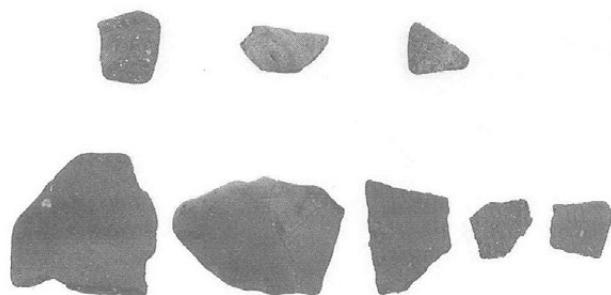
須恵器 壺



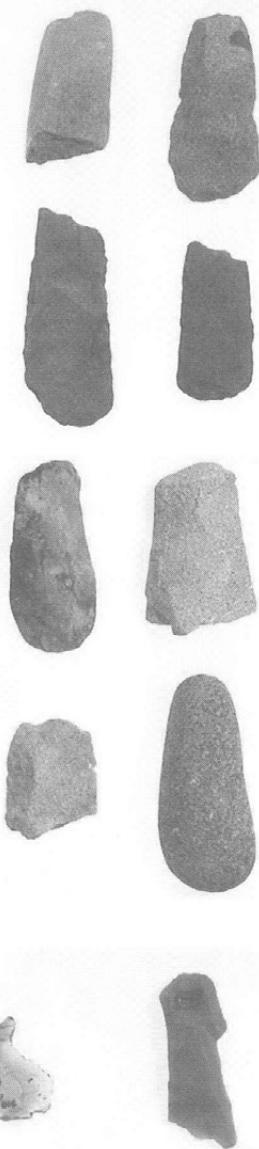
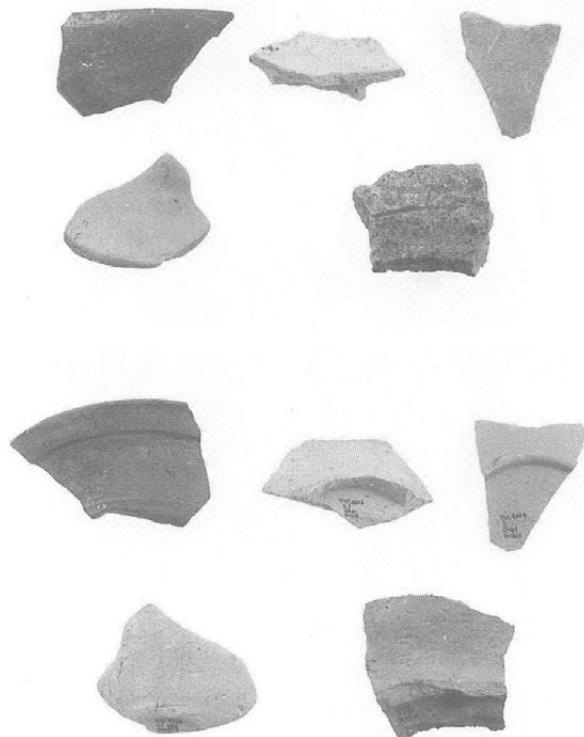
青磁等



L9はり床住居址出土遺物



上 縄文土器 下 平安土師器



上 内側 下 外側

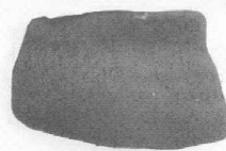
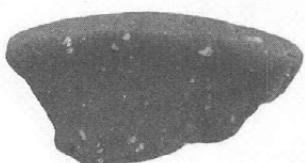
溝 址 1 出 土 遺 物



図版 7



縄文口縁



弥生壺

古墳壺

平安壺



溝址2出土遺物



ロームマウンド

E9P1出土石器



左 内側
右 外側

遺構外出土陶器



調査スナップ

飯田市鼎切石地区社会体育館建設に伴なう
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

天伯 B 遺跡

(五輪原地籍)

平成4年3月31日 印刷

平成4年3月31日 発行

編集 長野県飯田市大久保町2534番地

・発行 長野県飯田市教育委員会

印刷所 ヨシザワ印刷株式会社

